

福島県現代俳句協会会報

第8号 2021年・秋

編集 福島県現代俳句協会会報編集部 春日 石彦
福島市八木田神明十三の八 090(6220) 4757

県現俳主催・第2回吟行句会

「須賀川方部」に決定

十月二四日(日)に会いましょう

昨年郡山で開催した福島県現代俳句協会主催の吟行句会、今年は須賀川市で開催することになりました。詳しくは別刷チラシをご覧ください。多くの会員のご参加をお待ちしています。

各地域の「句会」紹介

「相双寒雷の集い」



県内各地区で地道に俳句を取り組んでいるところがあります。随時紹介しますが、初回は209回を迎えた「相双寒雷の集い」です。県現俳副会長の江井芳朗さんが中心になって進めておられます。この間はコロナウイルス感染症のため通信句会となっていますが、参加者が5句ずつ郵送し、江井さんが丁寧の評された結果を参加者に送付しています。

その7月号からいくつか抽出します。このような継続的な取り組みに対し、強い敬意を表すると

ともに、私たちが学ぶところが大変大きいと思います。

紫陽花や乗降客無き無人駅

川井テル子

天折の子の笑まふごと梅雨の月

木幡 テイ

震災を経し十年目の青田風

高野 美子

青梅の中の大粒餓鬼大将

門馬 愛子

サクランボの中にフクシマ友便り

渡部 健

楸郎忌厳しき香放つ沙羅の花

江井 芳朗

「7月号の秀句」

媪佇ち梅挽ぐ時期を見極めし

川木 勇子

江井さんがこの句に以下の評を書いています。

くやや報告気味の句ではあるが、感動場面を捉えている。(中略)媪が佇んで、梅漬けに良い梅の時期を判断している。少し熟れ時の頃が良いとも言われ、梅の少し黄ばむ頃を見極めているのだろう。梅漬け後の味を考慮してのことで、人間生きていく上で大事なことである。人間性豊かな句。

新入会員紹介

佐藤 保子(福島)

梅雨ぐもり煉瓦の赤に触れてみる
グランドの佇む鴉朱夏の点
虚をのぞく写楽の眼十二月

元来私は足が地に着かぬ性でここまで来てしまいい、俳句を通し実のある生活者の目線を得たいと願う次第。
ちなみに俳句へのきっかけは又吉直樹の自由律俳句でした。

草野志津久(福島・小熊座)

翅閉じて何にもどらむ夜の秋
かなしみの器ならきれいな春の水
長生きの長き独りやリラの雨

悼

田中雅秀様が四月にご逝去されました
謹んでご冥福をお祈りいたします

福島県現代俳句協会

雨の夜とけかけたアイスクリームを前に
ふと思う、私にとって俳句って何だろう。
たかが俳句、されど俳句。アイスクリームの
ようにとけて流れて、でも香りだけでも残し
たいが、できるものなら・・・

会員作品7句

桃の花

唯木 イツ子 (福島・小熊座)

葉桜や問診表に少し嘘
化粧の仕方忘れました含羞草
杞憂いま笑へぬ話春の空
つくし摘み途中で友を見失ふ
山姥に先をこされし蕨取り
風ちぎる青い五月を誕生日
吾妻嶺の風が育む桃の花

空

鈴木 満喜子 (福島)

蔓薔薇の捉へ損ねしものに空
己が鬱蹴散らしてゐる羽抜鶏
野葡萄を這はす心の鉄扉まで
芋嵐激し晩年持たぬ父
キリストと案山子共有する孤独
篝火に雪の狼狽きりもなし
しんしんと懺悔のかたち雪の樹々

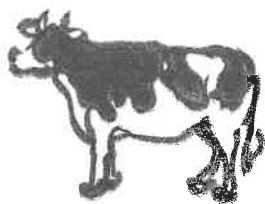
空気を殴る

五十嵐 進 (喜多方・らん)

風立ちぬ空気を殴るこの怨嗟
ほんとうはまるくなりたいたい君の虹
黒人霊歌土鳩が睦みあう陽炎
木々は皆羽垂れて飛び立つ気配
つゆ草の真水となつて残す色
夕映えや水燃えあがる千枚田
指の目で掌の目で土を読む

被曝牛

木幡 テイ (南相馬・岳)



四月馬鹿フクシマ沖に鯨デモ
被曝牛生かされ十年春の雲
若草の被曝の牧に牛二百
ふり向けばのどかな貌の被曝牛
青梅雨を貫きて磴尊徳廟
御仕法はわが体幹に青田道
スカイプもズームも無縁梅雨の底

異土の夏

丹羽 裕子 (福島・小熊座)

天井墜ちそうきつと死ぬ春の地震
店棚に「パンはお子さんに」と春寒し
青葉木菟ここより帰還困難区
大銀河抱く中間貯蔵の地
子は嫁ぎ二人の母に野紺菊
浪江焼きそば旨くて哀し小春の日
十日かなが十年経ちぬ異土の夏

ゆらぎ

鈴木 亜由美 (三春)



青楓宙を映して水滴る
縄とびの子らにさそはれ夏蝶来
猫の瞳細さ極まる夏至の庭
夕立の名残にあそぶ雀かな
虹立ちて君の横顔美しむ
紫陽花の影に湧くもの秘めしもの
鶉色の暮靄曳くまま初浴衣

県会員作品一句鑑賞

竜天に方舟を曳き昇りゆく

永瀬 十悟

平成二十三年東日本大震災を詠んだ五十句

「ふくしま」で永瀬氏は角川俳句賞を受賞された。

全国の読者に読んで頂けたことは何よりの事と浜通り在住の私は深く感謝申し上げます。

「竜天に昇る」と「方舟を曳き」を取り合わせるスケールの大きさ。感服する。その豊かなる詩情は年を重ねる毎に深まり、今これを詠まなければどの句集「三日月湖」で第七十四回現代俳句協会賞を受賞された事は慶賀に堪えない。

(柴田郁子・いわき)

草茂る被曝と知らぬ被曝牛

春日 石疼

三・一一東日本大震災の津波による原発事故により放射能が拡散して多大な被害をもたらした。家畜も殺処分され、または温情により野に放たれた。野生化した豚は猪と交わり猪豚が野を跋扈している。

被曝牛の牛乳は飲めないが、搾らないと乳房が炎症を起こすので搾っては捨てるを得ない、酪農家の悲しい現実を知ることが出来た。何故に罪のない牛にこのような罰を与えなければならぬのか。そんな現実を知らぬげに牛は黙々と草を食み続けている。

(池田義弘・福島)

私を変えた一句

水脈の果て炎天の墓碑を置いて去る

金子 兜太

この名句に出会ったのはいつだったか定かではないが、俳句は花鳥諷詠と思いついて私には衝撃の句だった。私の父も南方を転戦し、ボルネオ島から一九四六年の秋に漸く復員してきた。しかも、父は胸を病んでいて、咳き込んでよく寝ていた。

父はしかし節制を続け、八十五歳の寿命を全うした。この句を知ってからは父のことを多く詠むようになったし、俳句は我が思いを存分に吐露することになった。こそ、詠み手にも通じ合えるものと知るようになった。

銀行員等朝より螢光す鳥賊のごとく

彎曲し火傷し爆心地のマラソン

原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ

同時に兜太の句は、五七五の定型と季語を据えることを基本にしながらも、その五七五に捕らわれることなく、季語に語らせる必要がなければ無季でも構わないという、現代俳句の潮流をつくったようにも思われる。兜太の生き様を分明にしたこの名句に学ぶこと大である。

植木 國夫(福島)

朱鷺ときの思想脚しそうあしいっぽんで佇たつてゐる

齋藤 美規

この句は、わが師齋藤美規(「麓」主宰)が、「ニッポニア・ニッポン」の学名をもつ、絶滅が確実となった純日本種朱鷺、最後の高齢の雌キんに、ひと目逢いたいと佐渡の飼育センターを訪ねた際の作(平成一四年)である。

「水鳥はよく首を羽毛に埋めて片足で佇立するポーズをとる。これを考える朱鷺、それを(朱鷺の思想)と断じた」と、師は自解している。

私はこの句に初めて接したとき、フランスの哲学者パスカルの名言「人間は考える葦である」を想起した。

「人間は一本の葦にすぎず自然の中でもっとも弱いものである。しかし人間は考えることができることに、その偉大と尊厳がある。」というのである。人間のみならず朱鷺も同様と師は見てとり描写されたことに驚愕と感動をした一句である。

遡れば、江戸時代以前から日本各地に生息していた朱鷺であるが、文明の進化・自然環境破壊により絶滅せざる得なかった朱鷺への真摯なまなざしの二句をもって師を偲びたい。

日本の朱鷺をしづかに滅びさせよ 美規
ゆく秋のわが恋唄は朱鷺挽歌

★ 平成十五年十月十日 キン死す

国分 衣麻(須賀川)

私の好きな季語

「良夜」

海野 良夫

秋の季語と言えば、「良夜」が浮かぶ。

まずは、響きが良い。そして、「良夜」は名月の夜を指すだけでなく、名月の光を受ける地上の全てのもので平穏で息災という好ましい状態にあることを示唆するように思われる。

渚なる白波見えて良夜かな 虚子

山々のみな丹波なる良夜かな 林火

管楽器良夜の試音高からず 登四郎

良夜かな赤子の寝息麩の如く 龍太

室内・室外を問わず、穏やかで、平和な景を見せている良夜の句である。

この良夜つくゑに死後のつばさを置く

作者は小川双々子。「つくゑ」というからには、これは室内の景であろうが、誰・何が何・誰の翼々しかも「死後の」という奇妙な限定付きの翼をく机に置くのか解らない。月影がさす机とその傍の人だか亡霊だか鳥だかの黒い影は見えるが、翼の形状は解らない。解らないだらけのこの句から、しかし、「良夜」を厭い、冷笑している作者の声が聞こえるようにも思える。平穏で息災という好ましい状態だつて？馬鹿な。良夜の地上に見えるのは、生と死の間に放りだされて来た無意味な命の、そのつらい戦きがばかりではないか。なに？それが見えない？なら、お前は月の光に騙されたお人好しか、もう死んでいるんだよ。

前号会報より

この句がよかった！

浅田正文

満山に命の宴蟬時雨

櫻井潤一

東京から移り住み第二の人生の地（阿武隈高地）の初めての夏、エゾゼミの音量があまりにも大きく腹に響き度肝を抜かれたことを思い出す。掲句の満山に中村草田男の万緑が重なる。蟬の地上での短い命の間に子孫へ命を繋ぐ営み。精一杯の命の宴、悲しいまでの夏のエネルギー！

あるときはたんぼぼのこと忘れおり 高野カズオ

あの時を3・11と読み取った。早春の福島は未だ雪が残りたんぼぼには早いかもれない。それから数カ月して野山にたんぼぼが咲き始めるが、目先の暮らしや放射能被曝の恐れなどで余裕が無くたんぼぼが目に入らない。事故の年の心情が沁みる。

簡単な卒業式の盛上り

鶉川 伸一

新型コロナ蔓延で儀式も集会もコンサートも何もかもが縮小、延期・中止に追い込まれた。卒業式もその一つ、出席者が限られ時間も短かったことだろう。それ故如何に深い内容にするかに心を砕いたことだろう。式は出席者が一つになり盛り上がった。コロナ禍の卒業式はことに忘れられるものではない。

決壊せしダムに慰霊碑葦の角

高市 宏

東日本大震災で須賀川市長沼地区の灌漑用ダム「藤沼湖」が決壊し7人が亡くなられ、行方不明の方も10年目に犠牲者を追悼し災害の記憶を後世に伝えるための慰霊碑が完成した。亡くなられた方が、青々とした生命溢れる葦の角に我が命を託されたか。

被曝地やもう愛されぬふきのたう

永瀬 十悟

蒨の藎を摘むのは早春のありふれた日常。だが原発事故で汚染され食べられなくなってしまった。否、汚染度を測れば食べられるかもしれない。でも、そんな手間を掛けてまでして食べるか！奪われた早春の味、見るだけになってしまった自然の恵みよ。

きらめきて小石は鱗夏の川

阿部多み子

夏の光にキラキラと輝いて澄んだ水が流れていく。時には渦を巻き、川底の小石が光ったり影になったり、川全体が小石の鱗で覆われているに違いない。美しい日本の風景、平和を得た日々。川遊びを思い出す。

編集後記

会報が発行される頃は、オリンピックが終わり、パラリンピックが始まろうとする頃でしょうか。ただただオリパラが無事に終わることを祈るばかりです。晩秋には吟行句会が予定されています。皆さんと笑顔でお会いできることを願っています。